

評価機構

2016

1

月号

NEWS LETTER

特集

第32回国際医療の質学会(ISQua) 国際学術総会参加報告

イスクワ

平成28年 年頭のご挨拶
病院をたずねて
活動報告
Topics & Information



平成28年 年頭のご挨拶



公益財団法人 日本医療機能評価機構
代表理事 理事長 井原 哲夫

あけましておめでとうございます。平素より当機構事業に多大なるご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

おかげさまで、昨年7月に創立20周年を迎えることができました。1995年の創立以来、実にさまざまなお立場から多くの皆様のご協力をいただき、今では社会になくてはならない存在としてしっかりと認知されるまでになったと確信しております。

当機構は、中立的・科学的な立場で医療の質・安全の向上と信頼できる医療の確保に関する事業を行い、国民の健康と福祉の向上に寄与することを理念としております。病院機能評価事業をはじめとして、産科医療補償制度運営事業、EBM医療情報事業、医療事故情報収集等事業、薬局ヒヤリ・ハット事例収集・分析事業、認定病院患者安全推進事業は、いずれもこの理念の下、取り組んできております。

病院機能評価事業では昨年、創立20周年を機に「次世代医療機能評価のアジェンダ」として施策を取りまとめ、将来に向けた大きなビジョンを掲げました。現在、その具体化に向けて鋭意検討を重ねております。引き続き多くの病院が、病院機能評価を通じて医療の質のさらなる向上に取り組まれますよう積極的に事業を推進してまいりたいと存じます。

本年10月には、国際医療の質学会（International Society for Quality in Health Care：ISQua^{イスクワ}）の国際学術総会を、ISQuaと当機構の共催により東京で開催する予定です。世界各国から1,000名を超える医療に関わる専門家の方々が参加することが見込まれ、活発な情報交換がなされるものと期待しております。日本からも是非多くの皆様にご参加いただきたいと思いますと考えております。

引き続き、国内はもとより海外との連携も強めつつ、医療の質の向上、安全の確保に向けてなお一層の努力を積み重ねてまいる所存です。今後とも変わらぬご支援、ご高配を賜りたく、何とぞよろしくお願い申し上げます。

最後に、皆さまのご健勝とご盛栄を心より祈念しまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。

第32回国際医療の質学会 (ISQua) 国際学術総会参加報告

イスクワ
企画部 国際室 横山 玲
執行理事 今中 雄一

1. ISQuaとは：国際学術総会概要

国際医療の質学会ISQua (International Society for Quality in Health Care) は、世界規模で医療の質・安全の継続的な向上を支援し発展させることを目的として1985年に設立された国際学会です。2015年6月現在の会員数は、組織会員35カ国70団体、個人会員45カ国265名に達しています。このうち、日本からは当機構が組織会員になっているほか、24名が個人会員に登録されており、国別の個人会員数はオーストラリア、アメリカに次いで第3位となっています。

ISQuaの主な事業は、①医療機関等の第三者評価機関の国際認定プログラム (International Accreditation Programme : IAP)、②国際学術総会、③フェロシッププログラムです。当機構は2013年に①のIAPを受審し、評価項目および運営組織に関する認定を取得しました。

2015年10月には、カタール・ドーハで第32回国際学術総会が開催され、約70カ国から750名あまりが参加しました。今回は、2016年の東京開催の前年に当たるため、当機構から例年よりも多い13名が参加し、8演題を発表しました(写真1～3)。また、ブースには例年を越える600名以上の方々がいらっしや、「ぜひまた来年東京でお会いしましょう」ということをお伝えしました(写真4)。

2. 各国における医療の質向上および第三者評価の取り組み

今回の国際学術総会では、以下の6つの全体講演 (Plenary Speech) が行われました。以下のサイトから全体講演の動画をご覧ください(英語、<http://www.isqua.org/Events/doha-2015/recorded-sessions>)。

(1) “Innovation in Patient Safety” -Prof. Lord Darzi of Denham (Director of the Institute of Global Health Innovation at Imperial College London, Honorary Consultant Surgeon at Imperial College Hospital NHS Trust)

患者安全を推進させるために、医療者の行動を変容させる必要があるが、何を変えると行動がどのように変わるのか、というテーマで、さまざまな取り組み事例の検証について発表されました。特に、消毒用アルコール剤が設置されている場所に男性の目の画像を掲示することで手指衛生の実施率が高まったという例が印象的でした。

- (2) “Developing ‘Sticky’ Technology for Patient Engagement” - Prof. David W. Bates (ISQua 理事長、Chief Innovation Officer、Center for Patient Safety, Research and Practice、Brigham and Women’s Hospital)

ブリガム・アンド・ウィメンズホスピタルで実施されているPROSPECT (Promoting Respect and Ongoing Safety through Patient Engagement Communication and Technology) プロジェクトの検証として、iPadを利用した患者中心医療提供ツールキットを用いて検査結果、投薬・服薬状況、食事等の情報、日々の目標および最終目標を患者・家族と医療者チームで共有した結果、外来の患者さんについても患者・家族と医療者チームのコミュニケーションが密になった事例が紹介されました。

また、ツール自体が使いにくいと結局使われなくなってしまうため、使いやすさ (stickiness) を第一に考えて開発に取り組んだという話もありました。

- (3) “Building a Culture of Accountability” - David Marx (CEO of Outcome Engenuity)

誤った行動には、①ヒューマンエラー、②ハイリスク行動、③無茶な行動の3種類があること、およびそれぞれ対応方法 (解決方法) が異なることが紹介されました。また、エラーやハイリスク行動が繰り返される場合には、プロセスに課題があること、システムのデザインを変えることは簡単である一方で、文化を変えるのは大変であるというお話がありました。

- (4) “Medication Safety - Problems, Solutions and Challenges” - Professor Bryony Dean Franklin (Director of Centre for Medication Safety & Service Quality)

薬剤安全について、システム化で投薬に関連するエラーを減らすことが期待されたのに対し、逆に新たなエラー (薬剤の選択間違い等) が生じたり業務負荷が増加したりしてしまった事例が紹介され、患者さんの代表が診療システム全体の課題に関与する“Patient for Patient-Safety”というしくみが医療安全の向上に有用なのではないかとの説明がありました。

- (5) “Quality of Outcomes of Graduate Medical Education: Relationship to the Clinical Learning Environment” - Thomas J. Nasca (Chief Executive Officer, ACGME, ACGME International)

全米卒後医学教育認定評議会 (Accreditation Council for Graduate Medical Education: ACGME) が2011年から実施している臨床研修環境評価 (Clinical Learning Environment Review: CLER) に関する講演で、卒後すぐの臨床教育が、20年以上後になっても医療安全やコストに関する考え方を含めた医師の行動に影響を及ぼし続けていること、および臨床研修病院 (teaching hospital) とそれ以外の病院で提供される医療の質や費用が大きく異なっていることが示されました。

- (6) “Culturally Tailored Communication with Patients and Families” - Prof. Abdul Rahman Jazieh (Chairman, Oncology Department; Professor, King Saud bin Abdulaziz University for Health Sciences NGHARiyadh)

患者・家族の関与 (Patient- Family Involvement) に関する講演で、そのためのツールを紹介されました。また、患者が、治療方法等を決定する上で相談したいと思う家族 (キーパーソン) と、家族や医療者がキーパーソンと考える人物が異なる例も少なくないため、病状や検査結果を家族の誰に説明し、誰と相談して治療方法を決めたいか等を、患者本人に直接確認することが重要だというお話が印象に残っています。

3. 当機構からの発表

当機構からは、表1の8演題を発表しました。それぞれの発表に対して各国参加者からの質問があり、関心の高さが伺えました。

表1 当機構から発表した演題一覧 (順不同)

No.	タイトル	演者 (形式)
1	病院機能評価の過程で明らかとなった日本の病院の課題について	山野友子 (口演15分)
2	一般国民は医療機関を受診する前にどんなことを知りたいと思っているか	横山 玲 (口演5分)
3	医療事故報告制度および無過失医療補償・原因分析事業から得られた知見の日本における新しい医療事故調査制度への活用	後 信 (口演15分)
4	日本における診療ガイドラインの普及促進に向けた具体的なアプローチと要望について	奥村晃子 (口演5分)
5	産科無過失医療補償制度が質向上および医療訴訟件数に与えた影響	鈴木英明 (ポスター)
6	オーダーメイド医療の導入：医療の質および診療ガイドラインの役割への影響について	山口直人 (ポスター)
7	日本における患者安全の向上に対する認定病院患者安全推進協議会の役割	川崎悦子 (ポスター)
8	医療事故情報収集等事業および薬局ヒヤリ・ハット事例収集・分析事業に基づく薬剤関連事例防止について	坂口美佐 (ポスター)



写真1 口演1

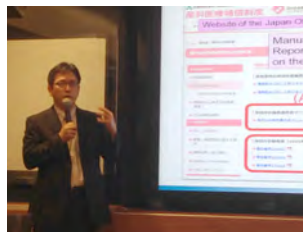


写真2 口演2

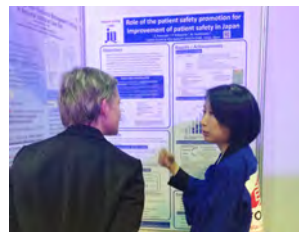


写真3 ポスター発表



写真4 ブース風景

4. おわりに

前述の通り、2016年の国際学術総会は、当機構とISQuaの共催により東京国際フォーラムで開催されます。メインテーマは「未来への挑戦：良質な医療を求めて 更なる変革と持続可能性」“Change and Sustainability in Health Care Quality: the Future Challenges” で、演題登録の締切は2月11日 (木) です。医療の質・安全の向上に関する皆様の取り組みをぜひ世界に向けて発信していただけますようよろしくお願い申し上げます。

※演題登録サイト (英語)

<http://www.isqua.org/Events/japan-2016/call-for-papers>



医療の質向上のためにユニークで先進的な取り組みをしている病院を紹介しております。

現場を動かしてこそTQM部に価値がある

社会医療法人 恩賜財団 済生会熊本病院

2015年4月よりTQM部の活動は大きく変わりました。それまで院長が兼務していた部長に中尾浩一副院長が就任、「医療の質協議会」を新設して、その第1回協議会が同年11月17日に開催されました。今後、4半期に1回程度開催していく予定です。

「医療の質協議会」は、外部委員2名のほか、医療安全管理対策委員会、院内感染管理委員会など医療の質に関わる委員会の長および関係部署の代表にて構成されます。TQM部の日頃の活動や院内のイベントについて報告され、外部委員にご意見をいただきながら医療の質について改善を図っていきます。院内での「医療の質」に関するリーダーシップレベルでは、経営会議である「管理運営会議」と同じ位置にあり、同会議とは一定程度の牽制関係にあります。

TQM部は、医療安全管理室、感染管理室、品質管理室の3室で構成されています。

医療安全管理室は、死亡症例とセーフマスター報告のモニタリングを実施しています。セーフマスター報告とは、各部署からのリスク事象に関する報告です。

死亡症例は電子カルテで把握され、翌日のTQM部ミーティングにかけられます。TQM部では、まず症例が医療事故調査制度の対象外であるかどうかを確認し、その後M&Mカンファレンスの必要度を検討して3段階ABCのいずれかを決定します。Aは「推奨」、Bは「打診」、Cは「不要」です。「推奨」に該当するのは、定期手術後30日以内の死亡、術後管理中の急変による死亡等です。

感染管理室は、毎日の感染の状況について監視しています。どこの病棟でどの患者さんが感染し、誰が主治医であるか等がすぐにわかります。アウトブレイクの早い段階で感染管理担当者が現場に出



向き、患者さんをどのように隔離するか等の対策を協議します。

品質管理室は、各部署が活用している医療の質に関する改善指標についてモニタリングしています。院内にはグレード1から4まで約80の指標があります。その中でも手指の衛生、転倒・転落の防止、鎮静後の合併症の防止に関する指標が重要視されています。

各部署では毎月1回程度、部署運営に関するミーティングを実施していますが、TQM部のメンバーはそこに出向き、前月の指標に関して発表を行います。続いて各部署の担当者が発表します。TQM部が一方的に話をするのではなく、できるだけ現場の意向を取り入れながら進められています。「言うことだけ言って自分の仕事が終わりででは前に進まない。現場が動かなければ意味がない」と中尾副院長は考えています。

現場に信頼されるためには、正確なデータの把握が必要です。モニタリングで不明な点があればすぐに電話で現場に照会します。そして各部署に足を運ぶことを繰り返します。

「同じことを愚直に繰り返していけば習慣になる。習慣は能力を上回る」(同副院長)。TQM部はこのレベルを目指しています。(企画部 林 秀行)

社会福祉法人 恩賜財団 済生会熊本病院

熊本県熊本市。許可病床数400床。2003年8月認定第JC0032号(一般200床以上500床未満)、08年11月認定第JC32-2号(同)、13年10月認定第JC32-3号(一般病院2(200床以上500床未満)(主たる機能))。

Topics & Information

各イベントの申込み方法、詳細については当機構のホームページのイベント情報をご覧ください。開催日の概ね2か月前よりお申し込みの受付を開始します。

<http://www.jcqhc.or.jp/> 日本医療機能評価機構▶ホーム▶イベント情報

1月～3月

1月	16日	Mindsフォーラム 2016
	16・17日	クオリティ マネジャー養成セミナー (第3回3・4日目)
	16・17日	医療対話推進者養成セミナー (基礎編) 福岡県開催
	17日	Minds×質研ハッカソン
	21日	平成27年度第4回Webinar
	29日	CVC研修会 (第4回)
2月	6日	診療ガイドライン作成ワークショップ④ (システムティックレビューコース)
	19～21日	医療対話推進者養成セミナー (導入編・基礎編) 宮城県開催
	21日	第7回業務工程図・医療事故情報収集等事業研修会 (対象: 医療事故情報収集等事業 参加医療機関)
3月	12日	患者安全推進全体フォーラム

詳細は順次掲載されるホームページをご覧ください。

■第4回 医療の質・安全に関する ウェビナー オンラインセミナー (Webinar)

医療の質・安全に関するオンラインセミナーをライブ配信します。

[日時] 1月21日(木) 19:00～20:00

[テーマ] 薬局ヒヤリ・ハット事例収集・分析事業の成果から考察する薬局の医療安全

[演者] 当機構理事 後 信

[対象] 医療者・病院関係者等

[形式] 45分講義+15分質疑応答
インターネット環境が必要です。
質問はチャット形式で受け付けます。

[参加費] 無料

[申込方法] 事前登録制
当機構ホームページ「イベント情報」欄よりお申し込みください。

[問合せ] 企画部 (03-5217-2335)

※Webinarの録画と講演資料は、後日ISQuaのウェブサイトに掲載されます。

<http://www.isqua.org/education/non--english-language-content/japanese-webinars>

認定病院の改善事例紹介シリーズ 「Improve」のご案内

認定病院の改善事例紹介シリーズ「Improve」(リーフレット)を発行しております。

今年度は「チーム医療」をテーマに、病院機能評価を活用して改善に取り組んだ病院の事例を紹介しております。2016年1月に発行予定の第5号では、山形県のリハビリテーション病院を取材し、地域に根ざした医療の取り組みについて、取り上げています。

バックナンバーは当機構ホームページにも掲載しておりますので、是非ご覧ください。



患者安全推進ジャーナルのご案内

当機構の認定病院患者安全推進協議会が発刊している機関誌です。No.42が発行されました。今回の特集は「グッドジョブ! に注目する」です。

バックナンバーの一部はホームページで公開しています。

●会員病院(1,000円+税)

認定病院患者安全推進協議会のホームページより会員サイトにログインのうえ、お申し込みください。

●会員外病院(3,000円+税)

当機構ホームページ>出版・ダウンロードからお申し込みください。

編集後記

10月16～19日に東京国際フォーラムで開催する国際医療の質学会(ISQua)の第33回国際学術総会では、多くの皆様のご参加をお待ちしております。

本年もより役立つ情報の発信に努めてまいります。引き続きのご愛読よろしくお願ひ申し上げます。

評価機構

NEWS LETTER

2016年1月1日発行
(奇数月1日発行)

発行: 公益財団法人日本医療機能評価機構 (略称: 評価機構)

発行責任者: 井原 哲夫

〒101-0061 東京都千代田区三崎町1丁目4番17号 東洋ビル

TEL: 03-5217-2320 (代) / (編集: 企画部) 03-5217-2335

<http://www.jcqhc.or.jp/> e-mail: info@jqhc.or.jp

本誌掲載記事の無断転載を禁じます